杉の世

十三

哥と詞を名ともあ

[Y.18]

PL788
.4
.G4
1654
vol. 18
copy 1
Asian
Japan
Case

THE LIBRARY OF CONGRESS

2004551302

源世々のるゝ事　二条院ノ東之

ひんぐしの院にうらそし。学ちう里とまうえし
いろうたし給。よしの屋(えい)にるどれなどうけて。ま
どころけいしなどあるべきさ内よしをうを給。東(ひんぐ)乃
屋(えい)はあるしのれるゝとおぼしをさてうり。きる乃
毎いとまひろくにうらをのてうりまても衣と
おぼして。に来かけてちさりこれぬ給し人ぐ。に
どひまむべきさ内よ。べぐてくしにうちをぬん
なしもなつしうんぐころありてこまりなり。志
源ノれやまこぶまとこ
んでんもふるげ給ちず。とさぐにうり給れまうん
所まして。さうゝなるれ志にひどもしをうせ
まうり。あるしまは源ノ れをうそこゝえどいまはなる紙

のぼりぬひぬべきことをばのぬへど。女(明石上ハ)はなをはづ男乃
ほどをしひしるに。こよなくやむごとなきは乃
人ぞゞる。中こさてかけはなれぬれあるさ夜のつ
れなさ紙こ川。おれしひまさりぬべくきくを。
ましてなるまだりの覚くなりとてかさしいでまじら
もむ。此(明石ノ姫君をはづ君と云ヘ)はづ君のれおもてぶきに。救(うず)なるぬ男のほど
こそあらはれぬ。玉さうまちひはつり語ついでを
まつことにて。人はへまちしこなきこといかり
あらんとしこゞれてもまたさりとてかうさらは
おひ(姫君ノ)出かずまへられ。海はざらんもいとあはれな
れば。ひらすらにもえうしこそむかず。おやうち(明石ノ入道尼君)も

げにことわりとおもひなげくに中々心もつきはてぬ。
むかし母君の御おほぢ中務の宮(兼明親王)ときこえけるがらうじたまひける所、大井河のわたりにありけるを。
そのゝちはか〴〵しうあひつぐ人もなくて、としごろあれまどふを思ひいでゝ、かの時よりつたはりて(入道ノ)(中務)やどもりのやうにてある人をよびとりて(大井ノ)かたらふ。(入道詞)世中を今はとおもひはてゝ、かゝるすまゐにしづみそめしかども、すゑの世におもひかけぬこといできてなん、さらにみやこのすみかもとむるを、にはかにまばゆき人なか、いとはしたなく、ゐ中びにける心ちもしづかなるまじきを、ふるき所たづねてと

なんせうろ。さるべきもれいあけつるさん。すりなど
してかたのごと人すこぬべくいづくろひなされ
なんやといふあづかり（やどかり詞）はとしごろらうずる人も
もれし給ひず。おやしきやぶまなりて侍れば。
しまやまぞつくろひてやどり侍るを。此善の比より。
内の（源）おほ殿の川（棲霞寺ニなぞらへたり）くらも給れ堂（こぶう）ちらくてかのつくり
なんいと人げさまがしうなりまて侍るいかしき
れ（こ）ぶうだんてく。おほくの人なん川くりいとなこ侍
めり。しげかなるれほいなしばかれやうぶひ侍らん。
なまかれも（入名詞）かれと（源）のれかげまかなうけてとしふ
ことありて。そのづらをひくまうちのことぐもは

しそん。まづいそぎて。おほかるのことぞを抱きよと
いふ。男（やどるり）づくらうずる所に作る。ひと。又しりつゝ人給
人もなければ。かごうなるなるひとそ。としどろく
ろ人作つゝなり。こゝさうの田をしけるまどいふと乃
いとづゝにあれ作しうば。故民（こえん）戸（ぶのこ）大猶（ゆふ）の君（無明智二男伊行之）に申し海
をりて。さうべき抱なるどをりて。なんらうじ川くり
作りをなんと。そのあるりのくちへのことども絵
あやうげにして。ひげぢに川なしくきうかを。
それなどうちあるめつゝ。をちぶきいへだ。さらに（入名詞）其（その）
田（さ）などやうのことは。こゝにしりまじ。こゝ年ばし
やうにして抱きよ。そん（券）なるどは家になんあれど。すべて

世中を拵(すて)うち身まで。とし比ともうくも曇(ぶね)ぶらぬを。
そのことも心腹くもしくしたくめんなどいふまも。
大(源)夏のけもひをうくれば。ぴづ(やどりん)ちしくそ。そのうち
まれなどおほくうけとりてなん。いそぎ門くりける。
かやう(明石ん)なおもひよりしんとも。しり(源ノ)給まで。のぼらん
ことを拵うがうもころえずおぼし。ぴ(姫君)ぶ(す)のさて
つくぐと拵しぬふを。のちの世は人のいひつる
へん。今ひときは人ゆゑさなどまやとおもほする。
門(大井ノ家)くりまてくぞ。しかくの所をなんしひ出うると
きそしさをけり。人(源ん)はまじらいんことを。くり(明石ノ)しげは
のこ拵すりいかくせふなりと心えぬふ。うちかし

うゝぬ心のよういかれとおぼしなりぬ。雅光(これこうれあきん)朝臣。
れいの思ぶかうこちたいいのとなく。いろひ川かうまろ
か人なれば川(大井へ)かもして。さるべきさ海なりこそ
うしこのよういなどきさせ給かり。おくるまおかし(惟光詞)
うて海(うこ)づらまかひたる所のさ海まなん給けると
きこゆれば。さやう(涼ん)のすまゐまよしなるらぜいかぬ
べしとおぼして。川くらき給ひ(こ)ぐうは。犬かく寺(じ)の南に
あたりて。瀧殿(うさどれ)の心ばへなどとゝぐおもしろき寺
なり。これ(大井ノ家)は川づらまえもいたぬ松かげに。なまゆ乃
いたりもなく。ふてくうしんでんのことそぎたる
さ海もをのづから山里の衣をきをうちのしり

らひなどまでおぼしよろ。おろしきんごいうじう
無びてくぐし(明衣)いうす。のぶれ(明ノ心)がこくて。いまもと
もふよ。としへいる漏(うう)をもなれなんこと衣よ。入道乃
こころぼそくて。ひとりとまのんことをおこぐれて。
よろぶよりなし。すべてなどうく心ぶくしよなり
もじめそん身よりと。つねのうらめさぐひうしや
ましくおぼゆ。おや(入道ハ)こちもかろかむくひよりて。
のぼ(家へ)なさいもひハ。としごろねてもさめてもねがひ
ひとりし。こころざしのうるふといとうれしそれど。
おひこそすぐさんいぶせさの。こんがこううなし
それがよりひるせほれて。おなじことをのこ。さらが

わか君をば見まゐらせでは侍らんことゝいふよりほかの
ことなく。姫君もいみじう哀なり。うばゞまゐるし
はりなもすゝめず。かけまもられつれば。おしてこれは
よりてかはりけれどもおもへん。うばおくるうちころ
人のあさましきことゝひぐるしまはれそなれて
りかゝし額にうちなしでめうぞ。よしてまてひがみん
まうしらつき心さそこそこれもしげなるれど。
又きこゆることそハ世をそむきなんとすゝしむ
めれとおもひそめぬ命をかぎりませてちぎりすぐ
しころをばはかなりもあれなんも心ばそし。
わかき人ゞのいふをうちひきつゞきつるもわれしき

抱かしこう抱(すて)がてさもまれさ夜を又ハえしもかへら
じかしとよすか波まさへて袖ぬれがちなり秋(尼ぜんの)
比ほひなれば物のあはれとりかさ心ちして
そのひとあかあり月秋風もじしくて虫のねも
とりあへぬま海のくさをいづしてぬらま入道
れいのご乗(や)よりふうあきて、されすらもうちして
をこなひぬましくりいきじうこといえすれどこれ
もこれもいと志のびがたし、つぎ(姫君)ハいともく
うつくしげまよりひかりけんむの心ちして袖より
ほかまもなち罪ざりつかを、ミなれて(入道ノ)まつもし
ゆへる心ざ夜など、ゆくしきまでかく人まこがへ事

力をいまくちくちからず。ゞ寄ころしでもいり
でくすぐさんとすんと。ひくころわへるも。
（入れ）りさ紀をもちかゝよいのワれ縁ぢりゝめん
ぬいはいの袖ありやりいとも色ゆくしやとて。せし
のびひくす。おまぢ
（尼君）まろともよろやこはいでさこのゝびやひとり
哀中れ程ままどりん。とてあるこ縁さ衣いとこともり
あり。（尼公ん）こゝろ紫ゝりしてつまりめゝ年月のほどを
せんぶ。ゝうすきころことをさのこそぢそし世る
ゑゝる。もどんぶもちあるしや。（岩）ほろ
（岩）のこそ文おひとんことをいりとてくかつぶりも

しらぬ世をバこれまんをくりまぐるまとをちまの給
へどうるぐまつけて。えさうまじきましをいひつ
川。さすがまゐのほどもいとうしろめたきけしき
なり。世中（入道訂）をすてもじめしまうる人のくらくしく
ぐり給しことも。ぐ志（略）のゆゑめしやうまおけ
れのれかしづきも。心まかるふやうもやとおもひ
ゆへさちしうど。身のつるなりけるはの。おもひ
しらるくことおほかりしかばさしまゐまかへ。
ゆるぎらう（受訓）のしげめるさぐひまて。まづしき家乃
よもぎむぐら。もとのゐ猶あしたむることもなき和
うしおほやけワるくしかりをそがましきゐを

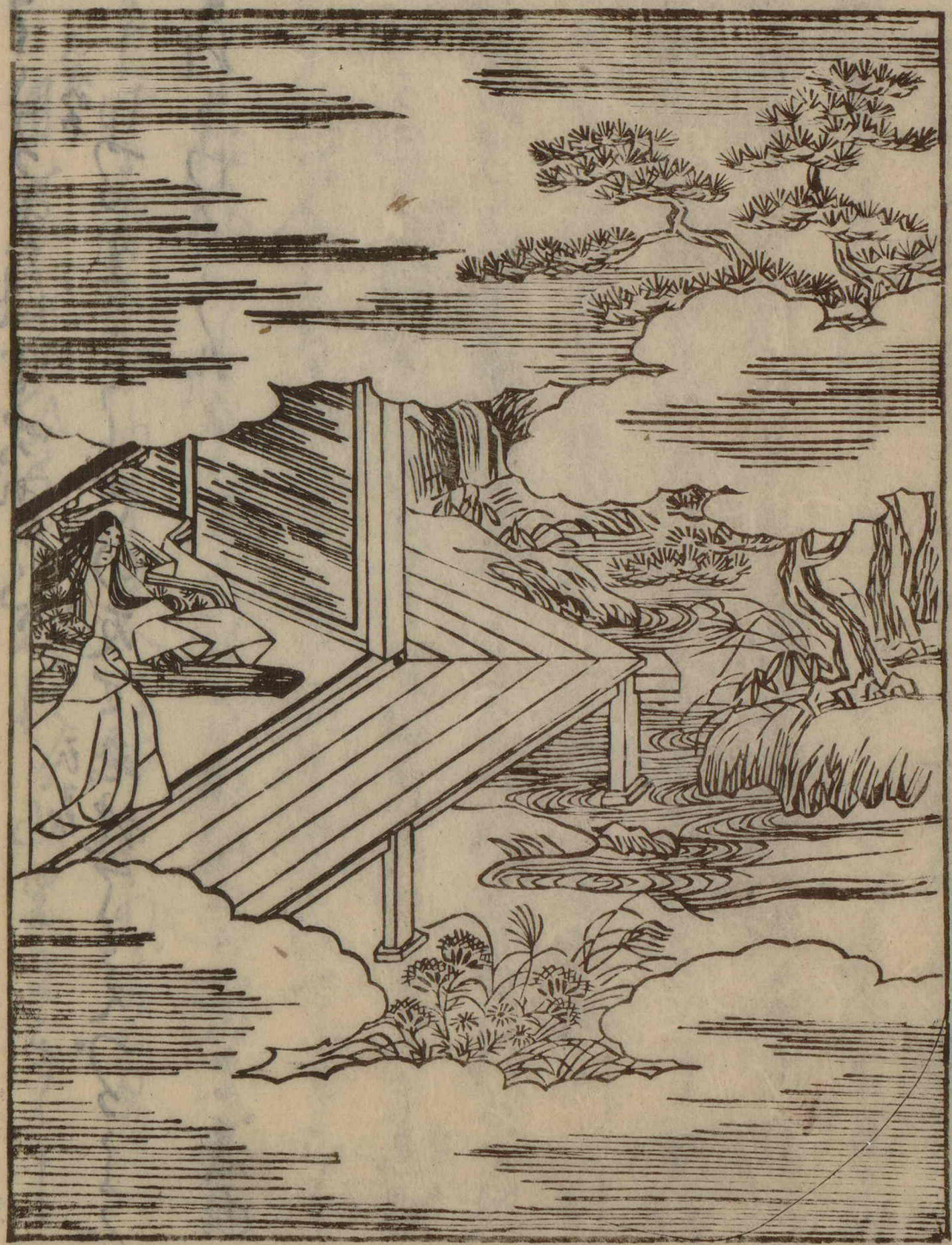
ひろめて、かやの所なるきうげをもづくしめんことの
いうじさまなるんやぞて世をすてゐるうどでなり
なりと人まもしられましをそのゝなりつけてハ
ようせひもなちてぞりとせひ行るは、忠(明石)のやうく
おとなびなひ抱おもはしせるべきまそへてなど
かうはおしきせらいまてよしき紙かくしきも
らんとうろのやきられまなくなげきはり行し
まゝは仏神(ぢじん)をこれきさてぞりともかうつる
なき男まひかれて山がりのいはりまてまぢり給
ちじとおもふ心ひとりをこれこ行しり、ぢうなも
がさらてうれしきとぐもをとりそめても中こ

身の間どを。とき夜かうざ夜よかるしうなげき絶
つれど。ワ（姫君）ゞ君のかういでおりしましうろ。此すくを
のこれもしさよ。かうなぎさは月日をゆし給ハ
んもいとかうじけなう。歎ことよ。おぼしこまんが
こまゆらざらん心まどひハしげめがくれど。此身ハ
なぐ世紙すてし心もべ。ゆきさ。君ぐちハ世をてら
しあべきひかりしろ。それが。しげしかる山がつの。心を
こぐり給ぐりの此歎（ちぎり）こそハおりけめ。天（てん）よむまるく
人のおやしきこゝのこちよかへるらん。一時ゆり
しひなずしへて。かふなぐワれなりぬ。命ハしき
ゆとさそしめすとも。後（のち）のことおぼしいとなむな

むしぬ別るれば心ぐるしきあれなどひむちあり物
うしろつりたるらんゆふまではつゆのれとさそ
ん。六時の行とめるも我心ならずうちまぎれぬ
ざるとて。これまぞうちひそこぬゆかれば車にわする
つげけんも前きく。うらくげくまけれ(ば)わづらひし
さそれどもの人ぐさもあちうちまうくろうへ志のぶ
れば。舟まで来びやりきとさめられば河の時ま
舟でし浴び。りしの人も家といひけり滝の銘ぶう
へざありゆくまゝまいるもれぶるしくぞ。今はい心
すゝまうまじく。おくられてあざめおるう

さしも年へて今さらはなるゝもれかたさぞずお
まどろみもやらぬ結
うれしまころもよりましあま船のさむさし
すまこぎの人家のそれかのく
いくたりゆきかふ船をもうつゝきまは
のりてわれの人まれおもふての船までかぎり
けふ日ふ人ぞいりのめ人は兄とがめれじ乃
心もあればいちの種もかろしはおもしろし家あん
さ夜もおもしろうて今宵へ行る海にはおなし
されば家の人の心ちもまさず苦のたし母をひ出れ
て哀なりけるもおほくりつくりそへてはらふある故

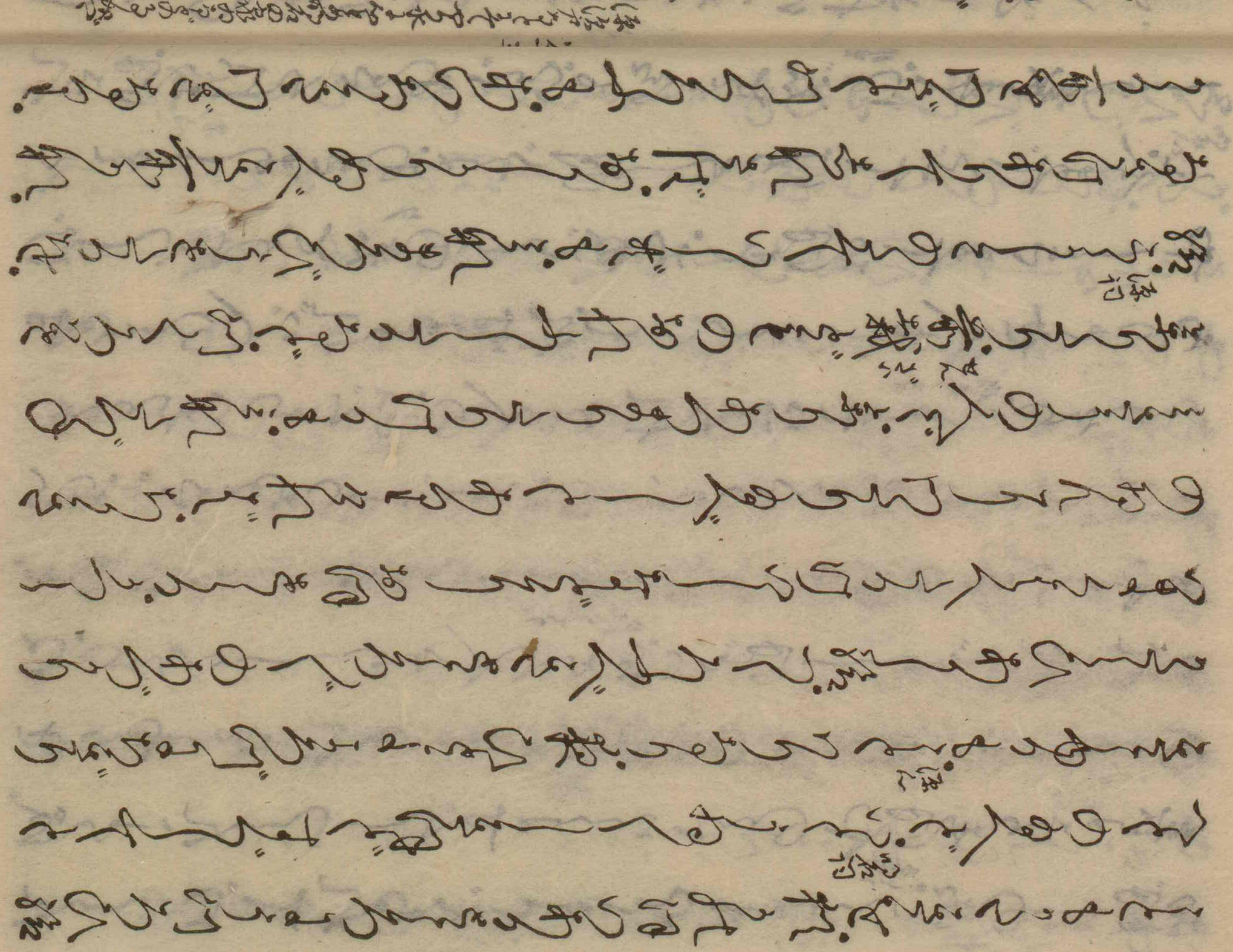
あるさ海に水のあがれもなりしうしあるしこり。まぐ
こ海やうあるにはあらねどすこゝりがさてもあるぬ
べし。(源ノ)しきけいしにおほをなて。れまうけの
こゝをさせ給ひり。けうり給りんこゝも。とううおほ
しこゞうほどに。日ごろへぬ。中(四名ハ)もれしけ
られて。とてし家ぬも逃しうつれぐなれば。れ
れ(源ノ)りこのきむ(琴)をうきあるす。おりのいこじう(志の)遣び
がこれば。人ぞあれこうかこにうちとけて。すこし
ひくに。松風をしこるくひぐきあひこり。何まぞ抱
がるしげまてよりふしぬる。おきあがりあ
(尼志)男をへてひとりまへれる山里にをてし

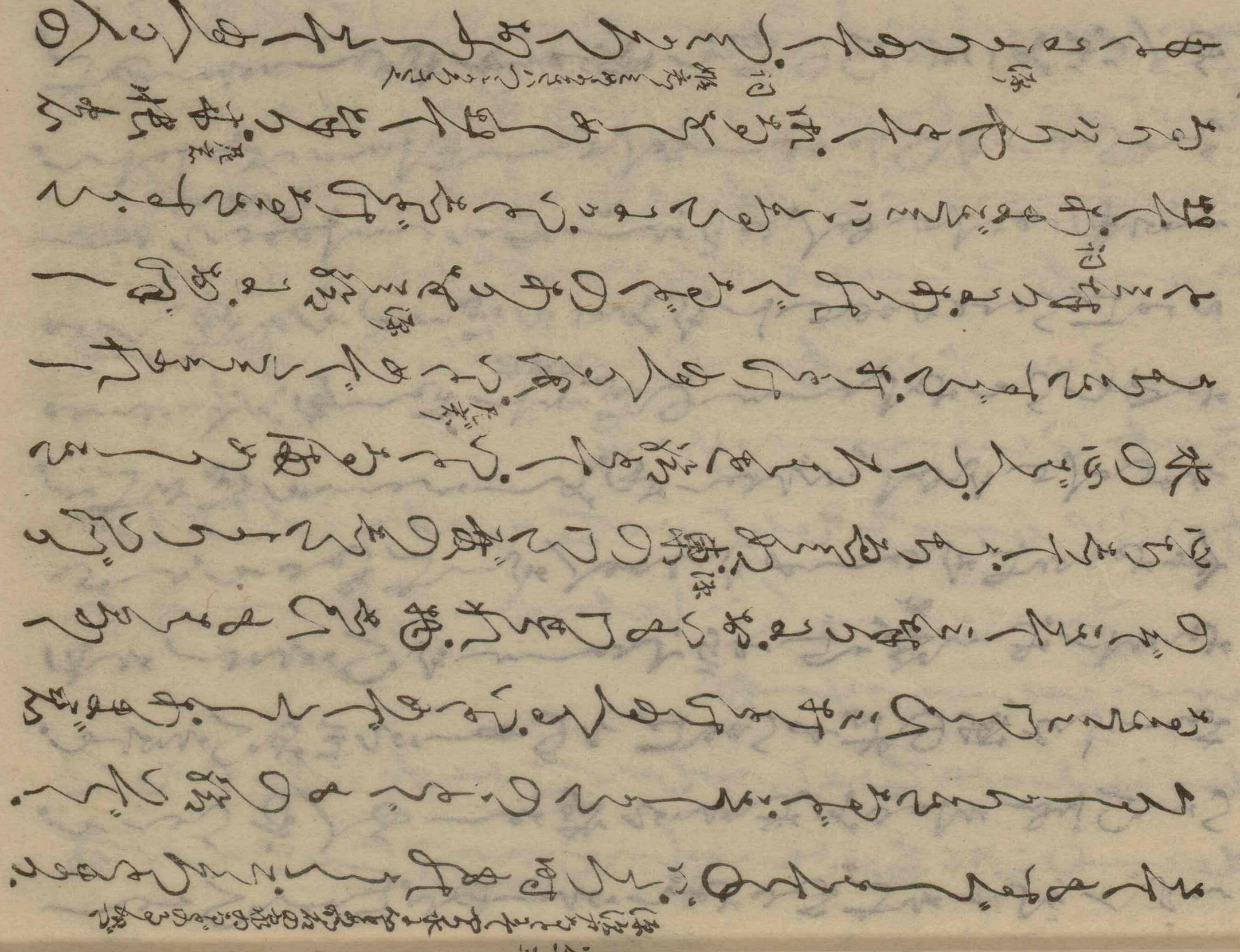


いはんやうまもれたれうそあしくゝ須に。おとゞ
なかくしげうろなく御すれば人先をもえ
もぐりあへ給もでけり給を。女ごさみりも
くなんとうしうまもしをなり給いざりけりを。
例のきくもやあもを給とて。せうそこ罪を給。うつゝ
まうべきことと侍りをいさや心にもあらで御ぞへま
りどふくりんといひし人さへ皮けうをちく
きおてまつなれば。うろぐりしうてなん。さがのゝ
こぐうまもかざりなさ佛のれとふしひしべかれど。
二三日はもべりなんとまうし給。うつゝの院といふ
所にはうまのりしを給とまくいそこにすへ給ふ

まやとおぼしてよ心づきなければをのこえさへあらこ
め給はんほどや。まちどをまと心ゆかぬれなしさ
なりれ（源河）いのくしべぐるしき（紫ノ）れころれ。つましへのあ
りさ夜。なぞりなしと世人もいふなるものをと。
なまやかやと（紫ノ）れころとり給ほどに。目こけぬ。志のび
やうに（ぜん）前うとさいまぎでれ心づかひして（源大井一）いたり
なぬ。こそかれば。まおりしつさたり。（源明石）のれぞに
やつれのへりしぐに。世にしらぬ心ちをしをまして
さりれ心して。ひさつくろひこまへるれなし。す
がこ。世になくなる夜めしらまばゆき心ちすれば。
（明石）さひむとびつる心のやこもなくやうなり。（源）光げ

しう衣まで。ぴり(姫恵)君をこゝ給もいかゞあさんはおぼされ
ん。今までへざてけりとし月ごまおさましをこく
やしきまでおぼせ。大殿だらの君(タ)をうつくしげ
なりと世人もてさもぐも。程時まられば人のこゝなす
なりやり。(姫恵ノ事)うくこそはすぐれたる人の山ぐちはしりり
かれと。うち思ふくるかのおまごろなさがおい
ぎやうつき旬ひたるを。いこごうらうしとおぼせ。
めれとれんぐりし。ほどはおさろ人(めれとうす)たりしかたち。ね
ひまさりて。ほごろの物語などなれきゝ也なを
衣まさる志ほやのくりしますぐしつゝんことは。
おぼしの語。(源詞)こゝまもいとさとぞなれて。ぴうゝん



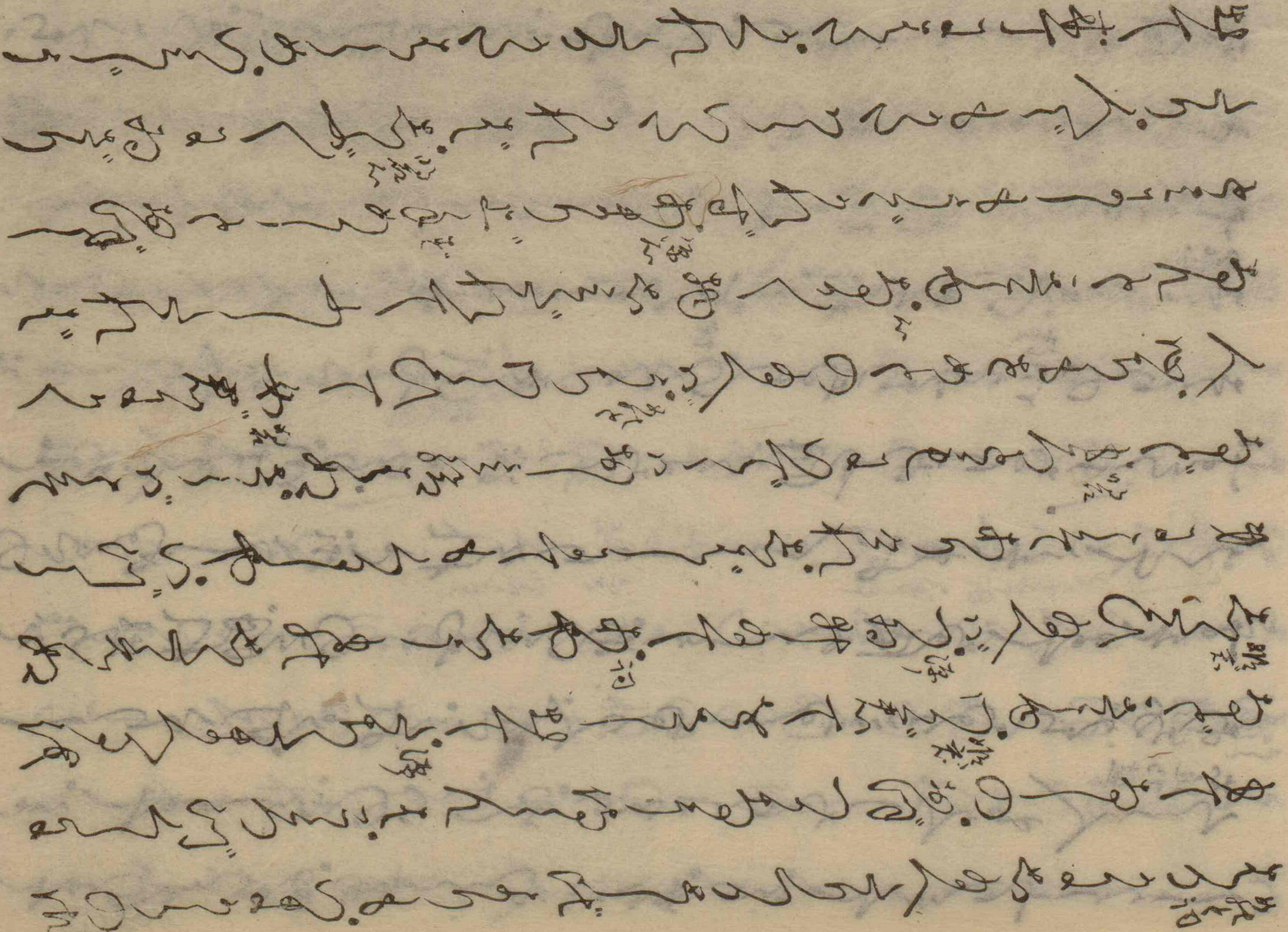


ゆへ八代をこなひの時ぐ衰まそせなしまこゝ曲れ。
いというくせひすましのへりしかすこうをすてく。
うき世まゝへりゆへる心ざしあさうしず。まこうし（入道ノ事）
こまはいうまさまりて。おとつを給ふんと。さ海ぐま
なんと。いとなつしうの給。（尾志詞）とて侍し世を。今さゝま
さちへりせゆへこゞうくなを。としまうしを給ふれば。
命ながされしましもせるまへしまられぬりと。うち
なさて。おし破（其）げに心ぐりしうせひまそしさせ
侍し。ふる紫の松もいまはこのもしきかおひさきと。
いまひ罪しさすりを。おさき孫ざしゆへやいりぐと。
こゞ心ぐされ侍りなどこゝゆ。けまひよし

ちりしのが（源）苔地がたりまみ（羽）そのとゝ（中務歌ニノ名ニ）給けるありさ風
などかたしを給まつくろもれたる水のをとなひ。
かごとがましうさも也
（尼宗）すゝなれしへいかゝりてこどれぞし水ぞ
やどのあるじがかなる。けざとはなくていひけつさ
風ゝやびかまよしとさ（源）ゝ給
（源）いさゝねいもやくのこともますれしを。もとの
あるじやおもがたりもろおもれとうちながめて
たち給。すがたまほひせましぐとのこせひ（尼宗ノ）四ノ石。こ（栖霞寺）
なは（源ノ）わたりなて。月ごとの十四又日のごもなり。
とてなまるべき。ふげんかうおうぐさ（れんぶつ）念佛のゝ

味(まい)をがさりまれまて。ぬくくもんをこちらをぬべき
こと。さぶめをうせ給ぶうのうぎり佛のれぐ。すぐ。
めづしおほきろ。月(源出寺より大井へ)のおりさまへり給。おりし(昭君を思べる)
夜のことおぼし出らるゝ。(昭君)おりすぐさぎうれきむ志
れことさし出たり。そこ(源ん)もうとあく抱衣ありまえ
まび給ちで。かさあらし給。まぐ志べもかりらず
ひきへしそのおりいまれ心ちしぬふ
(源)契しまかもしぬことのしんべまてしえぬ
心の月どをしりさや。女
(昭君)かちらじとわぶりしことをこのまて松の
ひぐさまねをそへしれど。ゆれしかしらるを

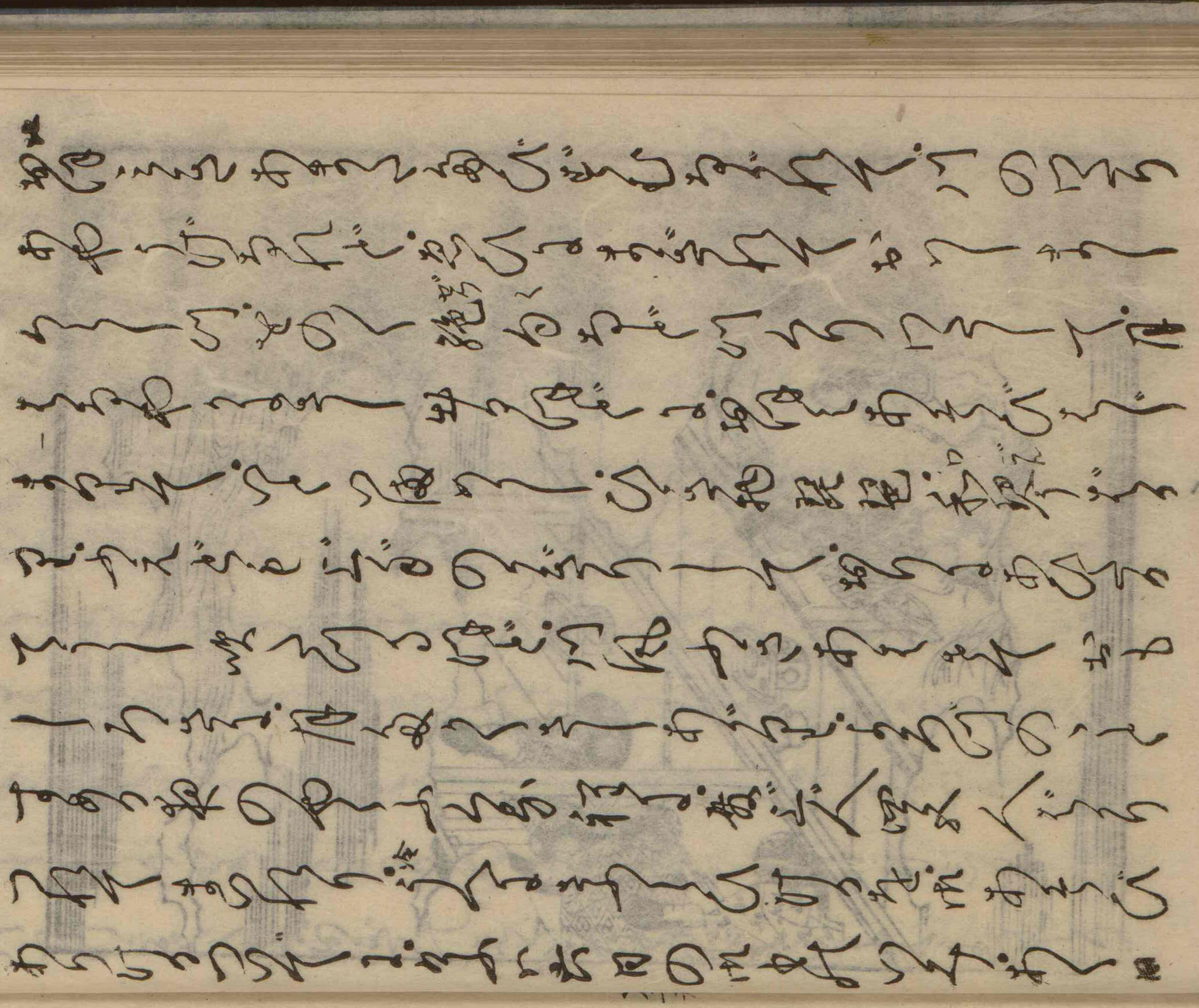
あそて。すくをこのあしとそしたり。又の日は（源）京人の屋
らをのべかれば。すうし出殿ごもりすぐして。やがて
これより出のべき紙。うつくの院に人ぐ御く事り
つどひて。（大井之）こゝにも兼ぶ人あまた事りたり。（源）出さう
ぞくあどしのて。（詞）いとしたるきつぎかれ。かくこ
わらはさるべき人間にもあらぬをとて。さまじ
きまひかれて出給。こゝろぐるしかれば。さりげなく
まぎらはして。こちとまりのへる戸ぐちに。めれと
つゞ君いぐきてさしいでたり。（源）衣あるれ乱色にうさ
なでのて。（詞）えでいいとくるしかりぬべきこそいとお
つけなれ。いかゞすべきいと罪とをしやとの給人ぞ



ち夜めってよしあり。さをやぎろけもひ。君こゝち
といはんまもたりぬべし。源 かたびらひきやりて。ゝ夜
やうまうこひ語とて。とぢりかへりゑぬへるなり
岩ん さしそ志げめつれ。こをくりきゝ。いたんかたあさ
さりの 源 れかたちあり。地 いたうそびやぎぬへりしが。
すこしありあふ夜どまあり語まなり。れすぐるなど
かくてこそもれくしかりそれとれさしぬきの
すそまでち夜めくしう。おいぎやうのこぼれ出るぞ。
あながちあるこちしあるべきかれとけたりし
右近の監 くゝ人もへりありまなり。ゆげいのぎうまて。こと
しかうかりそてぞり。芳まあくしあ。心ちよげまて。

れ。こしとりはよりきたり。人げもつけて。ほうし（落入詞）
きこの枕はれし侍しまでうしくれざえこそ。
衛風おぼし侍あらはさのねざめまも。おぼろしき
ちしきすべきことずくしまずくてとけしきならむ
とや（晩ノ女ナル詞　大弁ノ事）へろやまは。さしは鳴（壱事　晩ノ事）られみもをさらしざらし
けりを。松もかのとゐざられつらは。かすれぬ人も枕
し給けりまざられもしあざいふ。（落入詞）こまおすしや。我を
物思ひすきうしもあしざりしをあぞ。かさあし
うえゆれど。うまことさしまとうちけざやかて
気りぬ。（源）つとらそおしくさしあゆき給。御かしうまし
うぢひさしひてれ車のそりは。頭中将斉清のを（とうのちうじやうひやうゑのかみ　ここ神とも）

給いとかかぐしさかれがこあらはされぬるこ
それこうと。いこうかしかり給。よへの月ま。ぐち
（以中将音法ゐど此詞）
おしうれともまとられ侍まけると。おぬへられし
かば。げさ雰（きり）をまけてまいり侍る。山の綿（みき）はまぐし
う侍かり。明（の）ま色（べ）の色（いろ）こそさりま侍られおまがしの
（置上を鶴と云之）
あそむの。こゝかまかしづしひて。こちをられ侍ぬる。
いかゞなりぬんなどいふ。（添）ふは狂かつ夜まとて。そ
なるぞ夜まおりしましぬ。まちなるれあるじ志さ
ちぞて。うかねどもめしらるま。おまれさえづりおぼ
し出ろ。明まとまりぬるこゝこち。こゝり志るし年
引つけさをしろ。おぼれえぞなど叫とまして。まいれり

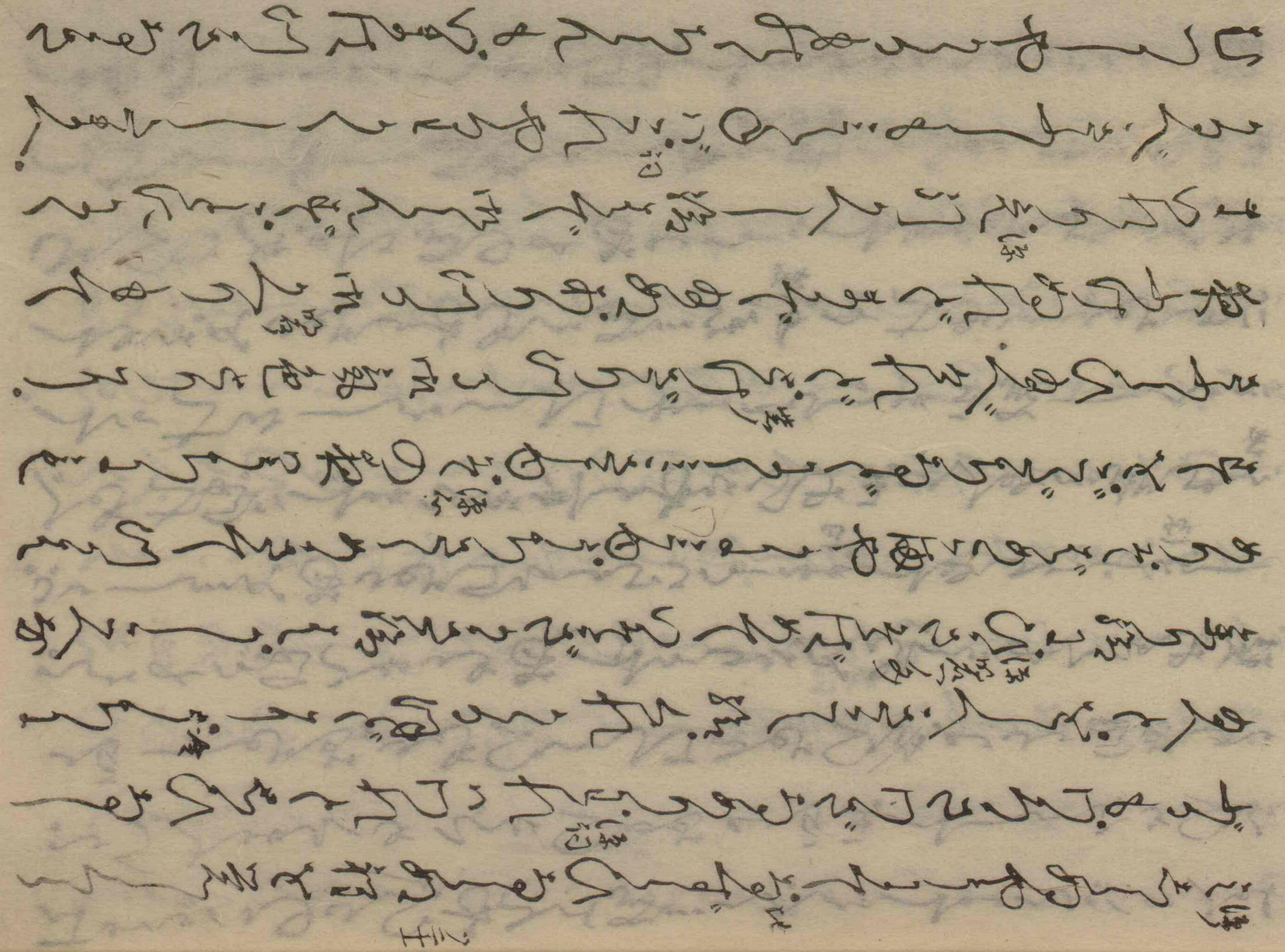


まて、かなしげ参りのべきせいかなれば、ものは
あられければ、さてはうとましきをものはけりうし
さうしめして、これをこそあるありけれ使はらく
人の弁ありけるし
ねのそむ河のながちなはとあれはうつの
けそのぜけりすらんかしやましきおりうして
まりそうしさる結ばん人のれおそびうりも、それなりとる
さのすずきに人そへころものくれをそめて、ぎらく思ひ
くさらねぬこしよりはまうけのまれもさぶらくいはずり
されば、太井はりざてあましぬまうけの釈やといふひ
いりしてりぜりあへるはさくぐひてまうし給

たり。きぬびけふ（二花之）たけまてあるを。れつひの年をと
くふりまいれば。女のさうぞくうづけ給
（源）久かたのひかりまちうさんのうしてあきゆふ
きりもたれぬ山里。（ぎやうがう）とまち（世）まち里を給れ心ばへなり
べし。（源心）中まおひたるとうちずんじ給つゆでまうれ
あまぢ（聖）鳴をおぼし出て（ミ）狐（ゐ）恒が。とうろうしうも
とおぼめきけんことなどのなひ出たるまに（世）衣な
れ思ひたまことをもあるべし
（源）めぐりきてまはとうづりきやけきやありぢの
鳴のあまとうし月。（朝中将）
（以平行）うき雲は志ぐしまぐひし月朝のすまとうる

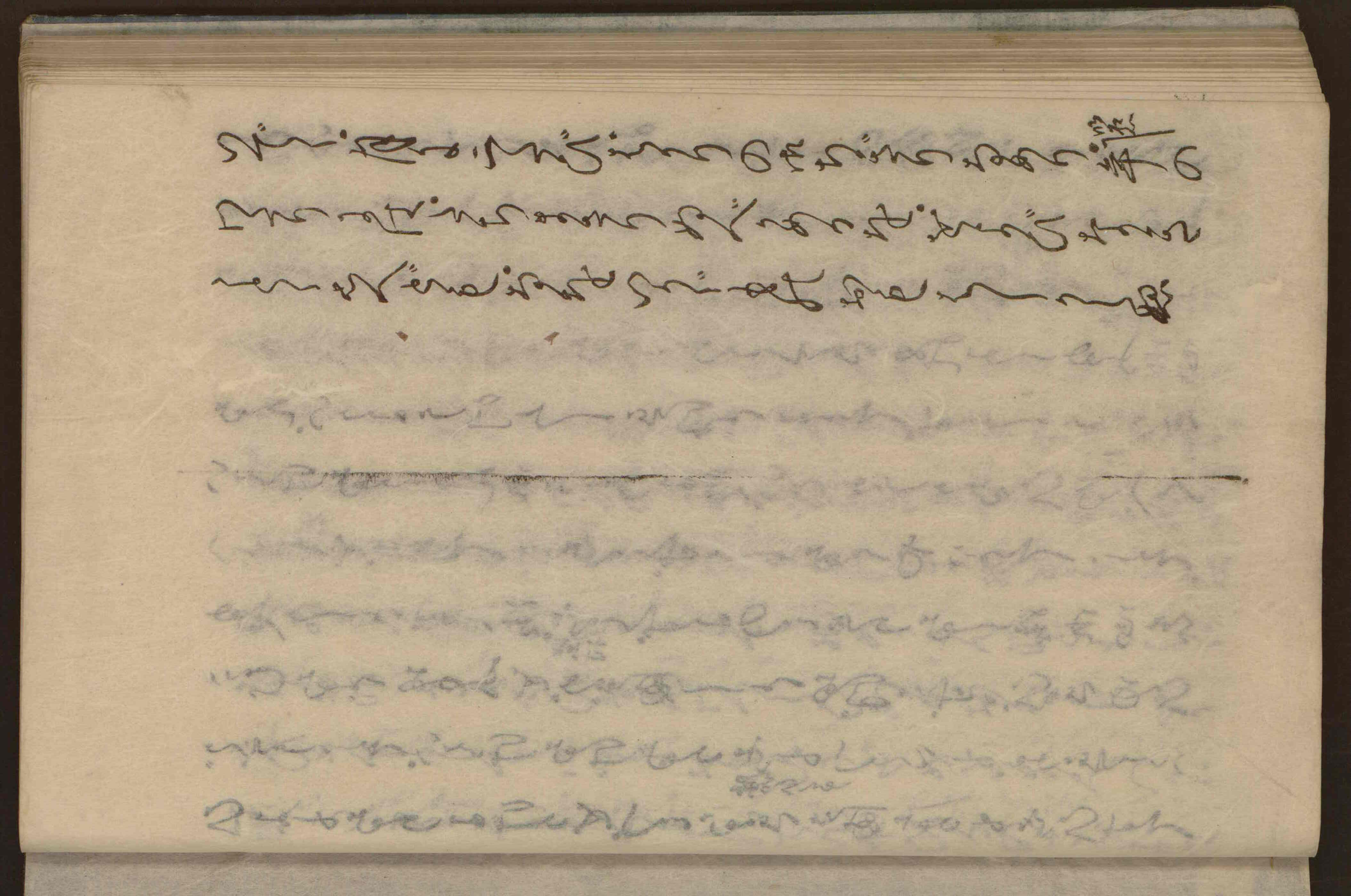
よぞのどけうるべき。左大弁（右イ）すつしおとらびて。故
院（相つぎ御門）の此時にもむつましうのうまつりなれし
人なりかり
雲（左大弁）の人のとみうをすてゝ夜中の月いづれの
こまゝかげかくしけん。心（地）ぐるしあまるあめれど。うる
さくてなん。けぢ（涼）うう折しづまりたる此物語すつし
うちこぼれて。千年もこゝさる夜侍しさ此何りさ夜
なれば。をのゝえもくちぬべかれど。かふさんもとて
いそぎかへり給。物どもしたれぐるかづさて。雪のる
えまゝにちまじるもたるも。前栽（せんざい）の菜にこしまがひ
たる色あひなどことなめでたし。を清（こん恋）づきの名

こゝさとゆり。もれくゝしどもなどさゝふゝり。
さうぐしなれば。そのうち夜などえぐれあそびて。
ぬぎかけ給ふ。秋のよしさを風の吹おほふゝとこ
ゆ。のくしりてくゝを給ひぐさ紙。おほ(昭君)けまは
抽へぐてしさて。なぐりさびしうなぐめ給。れきう
そこをぐるをでと。おとぐも(深ん)れ心ようれ里。夜り
おりしてとがりうちやすゝ給。やま里のれもれ紙
なと里れ給。いとまさてし(詞)ほどすぎつれば。いと
くるしうそこのすさもれどものぐるさていと
いさうしぬとぐりしよひかされて。けさはいとなや
ましとて。おほ夜ごもれり。(紫ん)例の心とけずえしなへど。



ほどまなりまさりとて。はけうそくまよりぬまて。
れ心のうちまいと（雖志ノ事）義は意しうおぼしやしられど。
実をうちながめてことは抱もの給ひず。文はひろ
ごりながしあれど。如（紫）志ゝ給はぬやうなるを。をめて
こうくし給れまじつもしそひづらもしかれとて。
（地）うち思ひなへる。れあつざやう事をさまでこぼれぬべ
し。（係）さしよりまて。（詞）まことはらうけなる抱をうしかが。
契おきくもこしぬを。さりとて抱めるさんほどももちに
りおほかるに。ちひなんひづらひぬる。おなじ心
ちひめぐらして。れ心におもひさぶめこまんへいかに
すべきこうくまてもぐらこ給てんや。ひろのこがらさ

ひまもなりまけるせつこなきさ雨なるもせひすて
がうこそいたけなげなる志もつくも（膝ゆひくる）まぎらへ
さむなどはまふをめぎ雨しとはばさずにひきゆひ
のへりと罪し給（雲詞）せもずるのこさりなし給此心志
へぐてをきめてこしらずうらなくやはとてこそ
いたけなるんれこころまはいとようなひぬべく
なんいかまうけりしほどまとてすうしうち忠
このぬちごをけりなうらうきもれましぬふ此心
なれバそていぐきりしづるぞやとはばとていかる（涼ん）
をまりしむかへやをまりしと覚しこぐろ（大井一）けりぬふ
ことのとかくしさがれくこぐうの念仏などまち



69038
6 AP78